

(続紙 1)

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	大原俊一郎
論文題目	ドイツ正統史学の国際政治思想—普遍的理念と外交的自律性をめぐる国際政治観—		
(論文内容の要旨)			
近代国際政治思想には幾つも大きな系譜が見出されるが、その西欧的な系譜の中では、いわゆるアングロサクソンの思考様式を淵源とする英米両国の（本論文はアングロサクソンのと称する）国際政治観が主流をなしてきたと言える。これに対して、本論文は、近現代のドイツにおいてレオポルト・フォン・ランケに始まる歴史学の有力な伝統（本論文はこれを「ドイツ正統史学」と表現する）の中に、アングロサクソンの国際政治観とは明確に異なる国際政治観（本論文はこれを「ドイツ的国際政治観」と呼ぶ）の一貫した知的潮流があることを論証し、その現代に至る系譜を詳しく辿ることでその思想的な内実が持つ国際政治的意味を考察・評価しようとするものである。 本論文の構成は序章と終章を合せて全部で5章から成っている。序章では、まずドイツ的国際政治観とは何か、という定義と共に、その国際政治思想としての特質を先行研究の紹介を交えつつ探り、本論文の視座を明らかにしている。とくに、国際政治思想上の契機としての普遍主義の位置づけの重要性を提起し、ランケ以後現代に至るドイツ国際政治史学の流れを検討しつつ、その中にドイツ的文脈においてこの普遍主義の契機が一貫して受け継がれていると論じる。また序論において比較の対象たるアングロサクソンの国際秩序論の紹介と定義も行っており、いわゆる「ドイツ対西欧」という文化的・思想的対置の国際政治的意義に説き及んでいる。 次いで第1章においては、ランケ自身の国際政治観を詳細に検討する。ランケと言えば現代日本では、ほとんど専ら実証主義的な史学方法論の見地から取り上げられることが多いが、本論文はランケ史学の根底には、有名な『列強論』や『政治問答』のように明瞭に国際政治・外交に焦点を置いた考察以外にも、彼の他の多くの著作の中に見られる国際政治秩序への問題意識に発している論点や視座を拾い出し、それらの分析から「ヨーロッパの多様性」を維持している支柱としての「守護霊」の概念を、ランケに始まるドイツ的国際政治思想の基本にあるものと措定する。そこから本論文は多元的均衡の中に自己の生存を確保しようとする複数の「普遍主義の並立」という問題に説き及ぶ。この競合的共存とでも評しうる秩序観の中に、ランケの見た近代ヨーロッパ国際政治の精神構造が、多極性の主張と中道主義の精神という形で、互いに内在的に関連したものとして見出せうと論じている。 第2章は、戦後西ドイツの外交史学をクラウス・ヒルデブラントの所論を手がかりにして、その中に見出される国際政治観と外交上の自律性への志向を探ろうとする。ここでは、まずランケ以後の19世紀から20世紀前半に至る、何らかの点でランケ的な史学的系譜に連なる複数の学派を概観した後、次いでその重要な流れを受け継いだ国際政治・外交史家としてのヒルデブラントを取り上げることの重要性を論証している。その上で本論文はヒルデブラントの中に明瞭にランケの『列強論』につながる国際秩序観の継承が見られることを強調し、とくに前者の代表的著作として「平和の中の戦争、戦争の中の平和—国際社会の歴史における正統性の問題1931—41」を重要な事例として取り上げて綿密に検討している。そこから本論文は、1930年代の世界には現存国際秩序の維持を基調として志向する勢力又は流れを「現状維持（主			

義)」とし、他方、唯一の普遍理念に基づいて国際秩序の根本的変革を志向する「革命主義」を対置しつつ、なおそれらに加えて、現存秩序つまり多元性を前提としつつその修正を志向する修正主義があり、それらの間の角逐と競合が第2次世界大戦をもたらす主要な原因となったことを論じる。そこから修正主義が持った多極共存の志向をも否定する1930年代の米ソ独の三勢力が有していた国際政治思想としての革命主義が、ヒトラー・ドイツの壊滅後、冷戦構造にストレートに直結したことの思想的構図を明らかにする。

この第2章が本論文全体のいわば中心部分を成している関係から、本章でさらに考察を深め、いわゆる中間位置理論とドイツ外交の根源的な自律性への志向が持つ思想的・精神史的意味をも探っている。

前2章を受けて第3章は現代、つまり冷戦終結後のドイツにおける国際政治思想を検討し、ペーター・クリューガーを中心にしたいわゆる「マールブルク学派」の国際体系論を取り上げる。さらに同章では、ハインツ・シリングらの近世国際政治研究の新しい成果を検討し、そこから抽出される「普遍主義間の対峙と共存」という形で、文明間対立と国際政治という21世紀の難問に対するランケ以来のドイツ国際政治思想のもつ現在の意義に注目する。その上で、本論文は、21世紀の多極的均衡秩序に求められる他者との共存という精神的・価値的契機的重要性を示すものとして、近世ヨーロッパの国際政治経験に多くの教訓を求めることができるのではないかと示唆する。このようにして現代ドイツの国際政治史研究の中にもランケ以来の思想系譜が明瞭に受け継がれていることを改めて論証し、そこにドイツという国家の辿った国際政治上の経験が、全体として、一貫した国際政治におけるドイツ的な思想系譜の表現と見なしうると論じる。

終章では、本論文全体を総括する形で、ドイツ正統史学の国際政治思想が、従来アングロサクソン世界（及びそれを受容した日本）において評されてきたように、国家理性相互の闘争としてのみ国際政治を見ているものと一面的に批判して、それを単に「ドイツ的リアリズム」として理解することの不適切さを指摘し、むしろ普遍主義相互の角逐と総合を一貫して探求した一個の理念論として現在もなお重要な意義をもつことを改めて論じている。そこからアングロサクソンの国際政治観の客観化・相対化の必要に説き及び、最後に結論として近現代の日本における国際政治観の自律性の確保について、その必要性と可能性にまで論及している。

(論文審査の結果の要旨)

本学位申請論文は、国際政治思想の大きな見取り図と枠組みを提起し、その上でランケに始るドイツ外交史学の現代にまで至る系譜を丹念に辿ることで、その国際政治観の歴史的・現代的特質を考察しようという、大変ユニークで意欲的な研究といえる。

とくに以下の3点で、本論文における取り組みと論証の成果は価値あるものとなっている。その一つは、これまで日本におけるランケ史学の受容が史学方法論の面に偏してきた嫌いがあったが、本論文はむしろそれが近代ヨーロッパの国際政治史の構造的・思想的な把握を焦点に置いたドイツに特有の国際政治観の一大系譜を成しているものであることを実証的に明らかにしている点である。そのために本論文は、まずランケに始まり20世紀前半の世界大戦の時代から20世紀後半の西ドイツにおける研究成果に加え、冷戦終焉後の現代に至るドイツ外交史学、国際政治史研究を長大なスパンの展望と詳細な論証を通じ、そこに国際政治思想としての一貫した流れがあることを具体的に論証している。その過程で、多くの関係資料・著作を渉猟し、適確に位置づけてゆく作業がなされており、その点でも重要な研究上の貢献を行っている。

第2に、本論文は、そのようにして抽出される「ドイツ正統史学」に特有の国際政治観を分析・考察するに当たって、従来の国際政治思想研究の分野で十分に試みられることのなかった分析枠組や評価概念を設定し提起している。たとえば、精神的な秩序形成力としての「普遍主義」の概念を国際政治思想分析の場で、これまでにない新しい位置づけの下に導入している。すなわち「2つの普遍主義」の相克と総合としての近代国際政治の歴史過程を描き出す国際政治史の可能性を打ち出していることである。それによって近現代のドイツが辿った国際政治経験の思想史的意味を考えるに際し、より深い洞察が可能となることを示した。

第3に、本論文は、上記の2点をふまえて、ドイツ以外の国々や地域を中心に発展してきた異なる国際政治思想の系譜をも、より客観的に分析・考察する視点を提供していることも重要な貢献として評価できる。従来、国際政治思想や国際秩序論の研究は、長く英米両国を中心に発展してきたことで、いわゆるアングロサクソンの国際政治観が支配的な影響をもち、特有のパラダイムを設定してきた。また、その直接的な影響を受けて、近代日本とりわけ戦後日本においては、この分野の研究視座が狭く限定されてきた嫌いがあった。本論文は、そこにドイツ的つまりその正統史学の系譜に見出されるドイツの有力な国際政治思想を対置することで、アングロサクソンの思想系譜を客観化すると共に、現代日本における国際政治思想研究や国際秩序論の視座に内在する問題点に目を向けることを可能にしている。この点での本論文の貢献も併せて評価され得る。

以上の諸点での評価をふまえた上で、本論文にはなお幾つかの概念上の不十分さが残っていることも指摘しなければならない。まず、本論文が頻繁に使用する「普遍主義」という概念の定義と内実に一定程度のあいまいさが見出される。とりわけ、ドイツ独自の、あるいはドイツ特有の「普遍主義」のあり方とその内実についての展開が不足していることが挙げられる。また2つ以上の「普遍主義」の角逐としての近代国際政治の展開を論じる以上、その国際政治思想としての総合の可能性や展望にまで論及すべきではないか、という指摘も可能であろう。

次いで、本論文において使用されている「革命主義」「イデオロギー」「超然的中道主義」の概念ないし用語も、国際政治思想の分析というやや特殊な領域での使用ということを考慮に入れたとしても、依然として定義や説明に不十分さが残る。

さらにアングロサクソンの国際政治観についての考察とその視野にも、やや狭さ

が感じられる。本論文は、いわゆる「英国学派」なるものをアングロサクソンの国際政治観の代表的類型と考えている傾きがあるが、この点はより広い視野からのさらなる吟味が必要と思われる。また、現代ドイツの国際政治論についての具体的な論述が十分でない点も指摘できる。具体的には本論文は、それをペーター・クリューガーやハインツ・シリングらによって代表させているように見えるが、さらに他の学派や他の国際政治観にも論及すべきであろう。その点が、本論文中、序章、第1章そして第2章と続く1つの大きな流れが、第3章に至ってやや「尻すぼみ」的になっていると感じさせることにつながっている。

以上のように本論文のメリットとデメリットを総合して考えれば、やはり冒頭に挙げた3点の長所が後段に列挙した欠陥や問題点を補って、なお十分に余りあるものと評価できる。併せて、その綿密な関係資料の読み込みと堅実な論証、さらには適確な洞察力が備わっている点も高く評価できる。このように、本学位申請論文は国際政治学研究において貴重な貢献をなしており、博士論文としての水準に十分達していると評価しうる。以上のことから本論文は共生文明学専攻現代文明論講座の理念にふさわしい研究であり、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成24年2月13日、論文内容とそれに関連した事項について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降